



警告 のニュースレター「角笛」

発行日：2013年7月発行（第39号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

◎巻頭メッセージ「御国の奥義」エレミヤ

◎証「サルデス(プロテスタント)の教会は御国が危ない?!」E3

◎お知らせコーナー 「黙示録セミナー」

< 巻頭メッセージ >

「御国の奥義」 by エレミヤ

本日は、「御国の奥義」として、このことを学んでいきたいと思えます。

< 御国の奥義による区分がある >

主は神のことばを聞く人々の中に御国の奥義にかかわる区分があることを語ります。以下のことばのとおりです。

“マタイ13:10 すると、弟子たちが近寄って来て、イエスに言った。「なぜ、彼らにたとえでお話しになったのですか。」

13:11 イエスは答えて言われた。「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。”

この箇所では主は主につく弟子たちには天の御国の奥義を知ることが許されているが、そうでない群集たちには、その奥義を知ることが許されていない、ことを語ったのです。

ですので、この箇所を通して私たちは聖書の明らかな概念を理解しなければなりません。

それは、御国の奥義に関連して、神は明らかに人々に区分をもたらそうとしていることです。すなわち、ある種の人々、具体的にはキリストにつく弟子たちには神は御国の奥義を開こうとされている、しかし、そうでない人々にはその奥義を知らせようとされない、という明白な区分があることを理解しなければならないのです。

< 御国の奥義とは何か? >

さて、というか、ところでその御国の奥義とは何なのでしょう? その奥義を知るとどんな良いことがあるのでしょうか?

想像できることは、この御国の奥義を知るなら、御国に入れる、ということです。たとえば、剣術の奥義を知るなら、剣術の達人になれます。また、料理の奥義を知るなら、料理の達人になれます。

同じ意味合いでもし、我々が御国の奥義を知ることが許されるなら、御国に間違いなく入れる、そう理解できます。そして、事実、主は御国の奥義を知ることが許された弟子たちに対して以下の様に天の御国を約束されています。

“ヨハネ14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。”

場所を用意する、すなわち天の御国の約束は、最後の晩餐のとき、そこに集まった11弟子に対してなされたものであり、確かに御国の奥義を知らされた弟子たちは、入るべき天の御国に入ることがはっきりとわかるのです。

さて、ひるがえって御国の奥義を知ることが許されなかった群集はどうなのでしょう？群集の多くは、はじめは4000人、5000人の給食のときの様に喜んでイエスのことばに耳を傾けました。しかし、その後、律法学者や、パリサイ人たちが語るイエスに対する否定的な声に耳を傾けるようになりました。そして、後にはイエスを冒涇者と決めつけ、最後にはエルサレムでイエスを十字架につけるべく、熱狂的にののしり、彼を死に追いやりました。このようにして、イエスを十字架につけ、救い主を殺した群集が天の御国に入らぬのでしょうか？そうですね、まず入らないでしょう。

天の御国の奥義を知ることが許されなかった群集は、結果として天の御国には入れなかった、そう理解するのが正しいと思われます。

ですので、これらの結末を見て、確かに御国の奥義を知るかどうかは、私たちの将来の行くべき道に関係していることがわかり、また御国の奥義を知らないと御国に入ることは難しいことがわかるのです。

そして、少し私たちには意外なことですが、御国の奥義をもとにある人を御国に入れるもしくは、入れないと区分することは他でもない神の方法であることがわかるのです。私たちの思い込みとは異なり、どうも、神は天の御国をすべての人に際限なく、自由に開放というより、入る人を区分されているように思われるのです。

そして、御国の奥義を知るかどうかが、私たちが天の御国に入れるかどうか大いに影響を及ぼすらしいことをも理解できるのです。ですので、私たちはこの天の御国の奥義を求め、理解すべき

と、思われます。

<見てはいるが、しかし、見ない>

上記テキストの続きは以下の様に書かれています。

“マタイ13:13 わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。

13:14 こうしてイザヤの告げた預言が彼らの上に実現したのです。『あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。』

13:15 この民の心は鈍くなり、その耳は遠く、目はつぶっているからである。それは、彼らとその目で見、その耳で聞き、その心で悟って立ち返り、わたしにいやされることのないためである。』

13:16 しかし、あなたがたの目は見ているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです”

この箇所から、その御国の奥義の区分とは具体的にはたとえを通して行われることがわかります。

すなわち、主が御国の奥義を理解することを許した人々は聖書のたとえを理解し、それを通して、奥義を理解する。一方、そうでない人々はたとえの壁に妨げられ、同じ聖書のことばを読みながら、奥義を理解せず、



種まく人

「御国の奥義」by エレミヤ

結果御国に入ることも危うくなる、そのような区分がなされると理解できるのです。

ここで、弟子たちに対して、「しかし、あなたがたの目は見えているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。」といわれているように、聖書のたとえを理解した弟子たちは、この方イエスキリストを正しく理解し、その確信は揺るがず、結果として入るべき、天の御国に入ったのです。

しかし、たとえを理解しない群衆は、このイエスに関する聖書の箇所を読みながら、しかし、その奥義を理解することはできず、結果目の前のこの人が聖書の預言していた救い主とは理解できませんでした。

“『あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。』”とのことばどおり確かに彼らは聖書の文字、字句は読んだのででしょうし、その方に関するメッセージを聞いたのででしょうが、真の意味では理解せず、結果として、目の前にいる救い主を悟らず、最後には自ら殺してしまったのです。

その人に、御国の奥義が開かれているかいないかによって、いかに大きな差があることがわかるのでしょうか。

<ペテロと御国の奥義>

御国の奥義を知ると人はどう変わるのでしょうか？私の理解では奥義を見た人、悟った人は、揺るがされなくなる、ということです。ペテロは、父なる神により、このイエスが誰であるか、その奥義を知らされました。以下のとおりです。

マタイ16:15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」

16:16 シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」

16:17 するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに

明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。

このように御国の奥義を知らされ、啓示されたペテロは、その後、揺るがされることはありませんでした。多くの人々がイエスにつまずいても最後まで石、岩としてとどまり続けたのです。

イエスを信じ続ける？そんなことは当たり前じゃないか、という意見もあるかもしれませんが、イエスの時代に生き、なおかつ正しくイエスをキリストであると理解する、悟ること、このことがいかに困難なことであったかを、今の私たちには正しく認識できていません。

しかし、その困難さは、福音書を読むとき、想像がつかます。聖書の専門家であり、聖書の学びに研鑽を積んだはずの律法学者や、パリサイ人、祭司も、みな、ことごとくこの方を悟らず、誤解し、逆に神を冒瀆するものである、と決め付けてしまったのです。

多くの当時の神の民、否ほとんどの神の民はこの方を誤解し、逆に迫害したのです。この彼らの姿は、終末の日の型であり、多くの神の民がこれから惑わされようとする時代に生きる私たちへの警告なのです。

しかし、御国の奥義が開かれた弟子たちはこの方を正しく認識し、聖書から、正しく理解しました。いかに御国の奥義を知ることが大事なことが、わかるのでしょうか。

<イエスの時は区分の時>

神はイエスを何故あの時代に遣わされたのでしょうか？誰でも彼でも天国へ入らせるためでしょうか？その理由は私たちの思い込みと異なり、民の上に区分を行うためです。以下の様に書かれています。

“ルカ2:34 また、シメオンは両親を祝福し、母マリヤに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。」

2:35 剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人々の心の思いが現われるためです。”

ここに書かれているように、このイエスが来られたのは、神の民の真の姿、真の心が表れるためです。

いわば、真に神に従う少数の正しい神の民のよりわけのため、こられたのです。そして、その結果、区分が行われ、弟子たちの様に真に神に従う人々には、天の御国の奥義が開かれ、反面、外側はきれいでも内側は罪に満ちた白く塗られた墓の様なパリサイ人たちには奥義が開かれず、この方につまずくようになりました。そのような区分を神の民の間に行うために主は、こられたのです。

そして、その区分は再度終末においても繰り返され、終末の日に新約の神の民の真の心が表れる日が起きるべく予定されていることを知りましょう。

< 黙示録は区分のために与えられている >

黙示録、ダニエル書とはどういう書なのでしょう？それは、来たらんとする終末の時代、すなわち、かつてなく今後もないという艱難の時代を正しく適切に過ごすべく特別に神により、備えられた書なのです。

性格としては、危機回避マニュアルみたいなものといえるでしょうか。しかし、不思議なことがあります。それらの終末を扱った黙示録などの書は、みな、何故か謎とたとえに満ちています。外国語で書かれたマニュアルの様に急場の役に立たないのです。

しかし、いったい何故なのでしょう？何故神は来たらんとする終末、反キリストやら、獣の国が跋扈する終末の時代、かつてなく、今後もないという困難な時代が到来するという終末の時代に関して、何故曖昧模糊とした、たとえや謎の書をもって警告しようとするのでしょうか？

私の理解はこうです。

神は私たちの思惑と異なり、終末を経て、すべてのクリスチャンを天の御国へ入れようとは思っておられない、逆にイエスの時代の様に、民の間に区分を行おうと思っておられる、だから、御国の奥義として、たとえによらなければ、理解できない書、黙示録を終末

の書として我々に用意したのである：

そう私には思えるのですが、どうでしょうか？恐らくあたらずとも遠からずであると思います。

ですので、私は思います。今の時代のクリスチャンは根拠のない安心や、思い込みを捨て、終末に関する、神のみこころ、方法を理解し、それこそ、慄然とし、恐れをもつべきである、そう思うのです。

はっきりいいますが、終末に関する啓示やら、封印は今の時代の教会に対して、さっぱり開かれていません。

7つの封印のひとつさえ、開かれていないように思えます。そうです、今の教会はいざ御国の奥義という視点で考えるなら、奥義が開かれず、封印が開かれず、啓示が開かれていない、そのような時代なのです。

< 主はたとえの理解に関して語られた >

黙示録は多くのたとえに満ちた書です。

しかし、そもそも、たとえを理解することは、聖書的なのでしょうか？今の曲がりきったキリスト教会では、霊的解釈はご法度、聖書は文字通り読むべしとのことですが、そんなことを主は語られたのでしょうか？

以下がその答えです。

“マルコ4:13 そして彼らにこう言われた。「このたとえがわからないのですか。そんなことで、いったいどうして(全ての：KJV)たとえの理解ができません。」”

主は種まきのたとえが理解できない弟子たちに対して叱責しています。



天の御国

もっとたとえが理解できるようにしろ、どしどし聖書のあらゆるたとえを理解していけ、そう語られたのです。ここには、どこにも、靈的解釈はやめろ、聖書は文字通り、語句どおり読め、などとの叱責はありません。

しかるに、何でもかんでも、主のことばには逆らい、無視し、逆におろかで無知な人間の神学者やら、註解書に聞き従う愚かな牧師や教師は、何一つ、たとえを理解しようとせず、せつせと主のことばと反対の方向へ向かっています。

主のことばや、叱責、忠告をないがしろにする彼らが結果として、たとえの書、黙示録を理解できない、としてもそれは、当然といえば、当然なのです。

<主は宮の崩壊を語られた>

しかし、主のことばに従い、たとえを理解するなら、聖書に隠されている終末の奥義、ことごとくを理解します。たとえば、主は終末の日に関して語られたとき、どの記事においても必ず、宮の崩壊から語られています。以下のとおりです。

“マタイ24:1 イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来て、イエスに宮の建物をさし示した。

24:2 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「このすべての物に目をみはっているのでしょうか。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」

24:3 イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」

宮の崩壊が終末と大いに関係することが想像できるのです。その宮の崩壊とは、何なのでしょうか？現在のエルサレムには宮は存在せず、したがって文字どおりの宮というより、たとえ

としての宮に関して理解するよう、神は語っているように思えます。宮の崩壊とは何でしょう？たとえを理解するなら、難しくはありません。以下のことばのとおり、宮とは、神を礼拝するところとしての教会のたとえであることがわかるのです。

“エペソ2:20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

2:21 この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、

2:22 このキリストにあつて、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。”

そして、「あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」との宮の徹底崩壊の日とはたとえとして、その教会の教理、信仰の徹底破壊の日を預言して語られているのです。そのような考えはとっぴに思えるかもしれませんが、以下の反キリストが宮の中に座を設けるとのことばと合わせて理解するなら、確かにその日は来るということが、予想されます。

“2テサ2:4 彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。”

不法（罪）の人、反キリストが宮、教会の真ん中に座を構え、今までキリストが占めていた座をのっとるのですから、当然、教会の教理も信仰も覆されるのです。

一例を挙げましたが、たとえを理解しないなら、多くの終末の記事を理解することは困難であることがわかるのでしょうか。今の時代はたとえを理解できない時代であり、それは、また御国の奥義を主によって開いていただけない時代であることを意味するのです。慄然とし、歩みを正しましょう。—以上—

ここ最近、レムナントキリスト教会の集会で、いくつかの“奥義”が示されました。“奥義”とは、御言葉の“奥義”のことです。“奥義”という言葉について、エゼキエル書には、このようなことが書かれています。

参照 エゼキエル書2:9,10

2:9 そこで私が見ると、なんと、私のほうに手が伸ばされていて、その中に一つの巻き物があった。
2:10 それが私の前で広げられると、その表にも裏にも字が書いてあって、哀歌と、嘆きと、悲しみとがそれに書いてあった。

9節の“巻き物”とは、「聖書」のことです。そして、10節の“表にも裏にも字が書いてあって”のところですが、“表”とは、「聖書の表面的な部分」、つまり第一義的な意味合い、もっと言うなら、そのまま文字通りに読み、解釈することです。“裏”とは、第二義的なこと、たとえの意味合い、そう、つまり“隠された奥義”のことを指します。そして、この言葉は、「私の福音とイエス・キリストの宣教によって、すなわち、世々にわたって長い間隠されていたが、今や現わされて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方、」(ローマ人への手紙16:25)の御言葉とも、まさに符号します。

さて、そのような“奥義”に関して、神様が聖書を通して所々語っているのですが、本日のテーマに掲げましたように、サルデス、つまりプロテスタントの教会のクリスチャンの永遠の命が危ないということに関する“奥義”を示されましたので、そのことについて御言葉から話をしたいと思います。私自身、プロテスタントの信仰を持つ者として、このことは決して他人事ではない、そんな導きを感じましたので、ぜひ、耳を傾けていただけたらなあと思います。

参照 黙示録3:1-5

3:1 また、サルデスにある教会の御使いに書き送れ。『神の七つの御霊、および七つの星を持つ方がこう言われる。「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きてるとされているが、実は死んでいる。
3:2 目をさましなさい。そして死にかけているほか

の人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。

3:3 だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。

3:4 しかし、サルデスには、その衣を汚さなかった者が幾人かいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らはそれにふさわしい者だからである。

3:5 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表わす。

いくつか、大事なことが示されているのですが、3節のところを見てみたいと思います。ここで、言われているのは、神様の目から見て、サルデスの教会、すなわちプロテスタントの教会のクリスチャンが霊的に眠っていることを言われています。また、「盗人のように来る」ということに関して、Iテサロニケ人への手紙にも、まったく同じ言葉が使われています。

参照 Iテサロニケ人への手紙5:2

5:2 主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。

いずれも、「再臨」のことを言われているのですが、「あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない」と、書かれているように、プロテスタントのクリスチャンは、主の再臨が、いつなのか、決してわからないということ言われているのです。

なぜ、キリストの再臨が分からないのか? 答えは明白です。多くのプロテスタントのクリスチャンが、艱難時代は通らずに、その前に天に挙げられるという教理を盲信しているからです。そういうクリスチャンは艱難時代に何をするのか? と、言う、正しいクリスチャンを迫害したり、はたまた、おかしい法律をもとに裁判に訴えたり、挙句の果てには死に至らせたりする立場に回る可能性があります。正しいがゆえに、試練、苦難に会うから、そういうクリスチャンにとって、試練、困難、艱難な時なのですが、反対に御言葉に基づかない、いわゆる艱難前携挙を盲信するクリスチャンの立場からすると、そういうクリスチャンはカルトとか原理主義者という風に見えてしまい、そのように扱うようになるのです。そう、正しく御言葉が言われていることに立たないなら、また、後生大事に艱難前携挙説を握り、艱難のための備えをしないなら、当然、艱難には会いません。

以前、エレミヤ牧師がニュースレターでメッセージをしていたと思うのですが、クリスチャンが皆、艱難に会うわけではなく、艱難に会うのは御言葉に従うほんの少数の人だけです。イエス様の時代で言うなら、12弟子をはじめ、主に従ったわずかの弟子たちだけです。反対に、ほとんどのクリスチャンは教理的にも霊的にもおかしいものを掴んでいくので、艱難どころか、逆に正しい人をどんどん追い詰め、迫害する方向に進んでいくのです。今は、特別大きな動きはありませんが、前月号でエレミヤ牧師がメッセージされていたように、これからキリスト教会は明らかにエキュメニカル推進(カトリックとプロテスタントの合同)へと向かっていきます。そして、アメリカの強権や強圧のもとに、正しいクリスチャンを排斥する方向へと全世界は進んでいくようになります。その時に、艱難前携挙説をはじめとするおかしい教理を掴んでいるクリスチャンは、正しいクリスチャンを迫害&排斥に加担するようになるのです。そして、その時には、I テサロニケ人への手紙に書かれているように、「人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみ¹が臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。」の御言葉が、彼らの上に成就するのです。艱難に会わないクリスチャンにとって、艱

難時代というのは、まさに「平和」であり、「安全」な時なのです。でも、「突如として滅びが彼らに襲いかかります」と書かれているように、その行き着く先は「滅び」、すなわち「永遠の刑罰」(火の池)なのです。

以上、述べたことは、“奥義”です。たしかに聖書には、ストレートにそこまでのことは書いていませんが、本日の御言葉が言わんとしていることは、このようなことなのでは? と、思います。主の再臨がいつなのか分からないというのは、私たちが考えている以上に恐ろしいことだということが理解できますよね。「突如として滅びが襲いかかる」のですから。もちろん、日付を理解しろとは聖書のどこにも書かれていません。ただし、艱難時代の真っ只中にキリストが再臨することは確かです。もし、主の再臨がいつなのかを本当に分からないのなら、あるいは、この奥義を理解できないのなら、天の御国を受け継ぐのは危ないと思います。福音書においても、奥義を悟るかどうかによって区分されることが書かれていますが、終末に関しても、そして、再臨においても、このことは適用されると思います。また、“奥義”は、イエス様の時代も群衆には解き明かされずに、弟子たちだけに解き明かされました。このことは、今の時代も同じことが言えます。ゆえに、志を与えられたのなら、ぜひ、キリストの弟子としての歩み、奥義を理解し、主の言われていることに恐れをもって実践していきたいと思います。それこそ、**「サルデスには、その衣を汚さなかった者が幾人かいる」**と書かれているように、プロテスタントにおいて御国を相続する人は、ごく少数であることが予想されますので、ぜひ、そのような歩みを目指していきたいと思います。いつも大切なことを語ってくださる神様に栄光と誉れがありますように。

—以上—

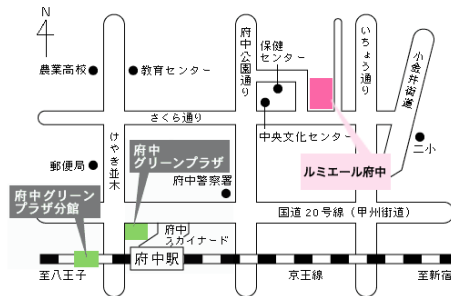
<お知らせコーナー>

- レムナントキリスト教会日曜礼拝：

午前:10:30-12:30, 午後 14:00-16:00

場所：東京、京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館(tel 042-360-3311)

場所の url: http://www.fuchu-cpf.or.jp/green/access/map_02.html



- 「エレミヤの部屋」終末預言解釈 HP （「エレミヤの部屋」で検索下さい）

黙示録、ダニエル書等、あらゆる終末預言に関する解釈を掲載しています。

- 「角笛」終末の警告 HP（「角笛」で検索下さい）

アメリカキリスト教会の背教の実態、悪霊のリバイバルなど、多数の終末関連の翻訳記事あり。

- 「黙示録を読む」無料メールマガジン

まぐまぐ ID:0000007108 毎日配信。終末に関するあらゆるトピックを掲載し、開始後12年、4000号を超えるキリスト教向けロングランメールマガジン

- 「トロントブレスingの真実」DVD

多くの人に衝撃を与えたDVD。トロントブレスingとは、ブレスingならぬ悪霊のリバイバルであることを映像、音声で伝える。価格 1000 円。申し込み先、レムナントキリスト教会

- 第 30 回黙示録セミナーby エレミヤ

黙示録、ダニエル書等終末に関するトピックを解説するセミナー。

北海道から、広島から熱心なキリスト教が参加しています。

場所:府中グリーンプラザ本館講習室(7F) 場所は上記。

日時: 2013 年 9 月 15 日(日)PM6:00-8:30

費用:入場無料、ただしテキスト代 1000 円(当日徴収)

定員:20 名(先着申し込み順。満員しだし締め切り)

主催:レムナントキリスト教会(tel 042-306-5002)

申し込み:メールもしくは fax で「名前、住所」記載の上、セミナー参加希望と申し込みください。

Fax 020-4623-5255 e-mail: truth216@nifty.com